



TITLE:

海外日誌(二二)

AUTHOR(S):

山本, 一清

CITATION:

山本, 一清. 海外日誌(二二). 天界 1924, 5(48): 35-38

ISSUE DATE:

1924-12-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/160194>

RIGHT:

海外日誌 (二二)

山本 一清

六月二日(月)

朝九時から天文臺。十時半頃、水野、安藏、田中、峰谷四氏が訪れて來られたので、天文臺の内外、望遠鏡や天體寫眞などを案内した。美しい日和で、青々としたローンの上で寫眞など取つたのも好かつた。夕方、シャブロー臺長と小マゼラン雲中の變光星に關して、いろいろ話す。

今日は少々風邪の氣味。

六月三日(火)

今日午後、天文臺内で南米コルドバから訪問せられたGパドク氏に面會した。始め、知らずに自分は氏を臺長宅に案内して行つて、あとで紹介されて其れと分つたやうな次第。

始めて撮られたといふウイルソン山天文臺全體の飛行機上からの寫眞が、新聞の切り抜きとして天文臺の掲示板にはられてゐる。立派な出来ばえである。

夜、レデオでボブ音楽會の演奏をきく。

六月四日(水)

今日から小マゼラン雲のベーチ寫眞を調査し始める。

午後二時過ぎ、英子と共にボストン南停車場から汽車に乗つて、ニウトン町へ行き、CNホームス夫人に迎えられて、アーリントン通りの同氏宅に案内され、こゝで主人に面會。二階の書齋に通されて、天文のこゝや、一般サイエンスのこゝ、それから昔しのケンブリヂの話を聞いたりする。五時頃から同夫妻と自働車に乗り、一通りニウトン町の案内をして貰つた後、轉じてコンモンエルス街を眞すぐにボストンに入り、ニウベリー街の亞州公司でハイカラな支那食をいただく。

後、ケンブリヂまで送られて歸宅した。——愉快な半日であつた。

六月五日(木)

夕方散歩。後八時から自分だけ天文臺の天文談話會に出席。ライデン氏の「星の質量と光度」、ベイリ教授の「南方の銀河の研究」の二講演があつた。

六月六日(金)

午前中、英子は天文臺へ来てゐて、バサデナから歸つて來たミス・ハワードに會ふつもりでゐたが、ミスの方が何かの差支へで、來なかつた。

六月七日(土)

今日からベーチ板を測る。

夕方、北澤氏、それに次いで上井田中峰谷三氏も來訪。おそくまで話す。

六月八日(日)

朝十時半、約束の通りハーバード廣場で藤原氏と會し、三人で電車に乗り、コンコードに遊び、古戦場やエマソン館やスリーピーホロに墓地あたりを歩く。天氣は餘り好くなかつたが、先きに、未だ雪のある頃來た時とは全く景色が違つて、いかにも春ののどけさがあつた歸途、アーリントン高地の日光亭で食事し、それから北ケンブリヂの藤原氏宅で暫く休んで、夕方歸宅。

六月九日(月)

午前中、ボストンへ行つて増電トランスフォーマーを買ふ。

午後天文臺。

六月十日(火)

午後四時半、セーレムから態々アダムス夫人とローザモンド嬢とが天文臺へ參觀に來られたので、例の如く寫眞や模型や望遠鏡などを見せ、星のスペクトル分類法などについて少し立入つた説明などした。六時頃、二氏は案内して宅へ歸り、英子の料理の日本食を饗した。ローザモンド嬢の箸の持ち方など、うまいものであつた。

夜 田中峰谷兩氏來訪。ロンドンの土産話などきく。

六月十一日(水)

午後四時から、シヤプー臺長の招きにより、臺員一同は臺長宅の南園でテイを頂く。英子は日本服で列席。之れが今年度分のテイの最終らしい。來週から各自夏休みをなさることとなる。

夜、レデオの二重増音器を組立てた。

今日のトランスクリプト紙に「空室を求む」といふ廣告を出した。――さて、何んな手應へがあるか?

六月十二日(木)

小マゼラン雲中の變光星八十七個の週期決定一先づ終了。結果をシヤプー臺長に提出し、午後からは直ちに大マゼラン雲に取りかゝる夜、昨日の増音器よく働らき、會々クリーヴランドで開會中のレバプリカン黨の大會の様をきく。

日本の新内閣諸大臣の顔振れを知る。

六月十三日(金)

天文臺の前庭には美しい花が咲き亂れて、歸人たちは大喜び、窓外は新緑の盛りである。

夕食にはマイン州の鮭で、いゝ味の味はふ。

夜、ボストンのトレモント會堂の新レデオ發信所から禮拜式がきこえる。

六月十四日(土)

新聞廣告によつて十通ばかり貸室申込の手紙が來た。その中でリニア通のミセス・ホランドの宅が一番好きそうなので、今朝出勤の途中で寄つて見た。同家族が近々田舎に避暑するので其の不在中を借りて貰ひたいのだといふ。總てのフアニチュアを其のまゝにして置くと言はれるから有難い。午後再び英子と共に見に行つて、いよく借りる事決定した。

新電池を使つて、レデオ大成功!!ボストンの音楽が室内に響き互る。

六月十五日(日)

午前中、レデオで居ながら聖ポール堂の禮拜式をきく。
午後二時からリミア線電車でチャルスタウンのバンカーヒルへ散

歩に行き、有名な紀念碑の中へ入る。今までは、遠目に唯一塊の石碑ださのみ思つてゐたのに、來て見て、之が花崗石の積み上げであり、中は二百九十四段の階段によつて上まで上れるには驚いた。碑の高さ二百五十呎、碑の頂上でグアジニアから見物に來た一小學教師に會ひ、バンカーヒルの戦鬪當時の説明をして貰つた。それからボストンを経て歸る。

夜はオペラ・ハウスからの音楽が聞えて、午前一時過ぎまで續いた。夜半前、余り高音なので電流を弱める。

今日は米國全體「父親の日」といふのだが、人は皆忘れて了つてゐるらしい。

六月十六日(月)

朝十時から天文臺。例の通り大マゼラン雲の研究。C館から飛行機が見えるといふので婦人たちが大騒ぎ。

シヤプー一家は今日からウグボールへ避暑に行つた。

夕方、ハーヴード大學ヤードへ二人で散歩して見る。大學は明日がクラス・デーなので、何所も其の準備で大賑ひ。

六月十七日(火)

今日は大學の同窓會日で、あたりは大賑ひ、自分等はキンガ教授夫妻に案内されて、午後四時からチャルス河向ひのステデウムへ行き有名なクラス・デー式を見る。各クラスの行列、チーア、演説など、最後に切紙戦があつた。同窓生の中に一八六五年卒業といふ老人が交つてゐたのには驚いた。

夜には大學ヤードの中は日本提灯の章魚釣り^{エビ釣り}で立派に飾られ、ワイドナリ館の石段ではクリーヴラフの人々の合唱がある。それに樂隊も加つて、全くの御祭り気分、自分等は、やはりキンガ氏から貰つた切符で入場。

六月十八日(水)

そろそろ大マゼラン雲の中の變光星の變光曲線が出来始める。此の大雲の方は今まで誰も手付けなかつたのであるから、今何物か、出

て来る毎に興味が有る氣がするが、残念な事は、小雲の方に比べて日順の好都合な寫眞原板が少ないので、仕事は一通りでない。比較的に微星の曲線は明かであるが、十五等級のものには變光の證據が上らないのが可なりある。こうしたものか。

歸途、電車の中から、ふと見ると、元のワシントン・エルムの所に George Washington Spore といふ新しい命名の金板が立てられてある

六月十九日(木)

朝九時半過から大學のシヴァ庭で卒業式が開かれるのに出席。式は行列入場に始まつて、合唱やら演説やら學位及證書授與やら、嚴めしくはあるが、一體の氣分が落付き過ぎてゐるのが、何だかアメリカ流でないやうに感じた。ラテン語の演説があつたのは當てられた。學位を得た者の中に日本人の名も三つ四つあつた。

午後は天文臺。四時半頃、突然コンニード・ザヤンクシヨンのストーン牧師が來訪せられたので、一通り天體寫眞や望遠鏡などを見せた後、自室で宗教論をした。

日本からの抗議に對するヒュズ國務卿の回答が發表された。くどくで、しかも少しも要點に觸れてゐない。之れでは外交論戰として日本大勝だ。

六月二十日(金)

午前中、宅でローヤル天文學會史を読む。午後は天文臺。夜、レデオのハイネス式に増電を施して成功した。しかし、音量は大きくない。

六月二十一日(土)

夕方、加藤氏來訪。

六月二十二日(日)

朝十一時から、レデオを受けてボストンの聖ポール會堂の禮拜式を開く。結構な世の中なる哉。

午後、非常に暑い。夕方北ケンブリヂへ散歩して活動畫を見る。

六月二十三日(月)

午後四時、天文臺を出て、ミセス・ホランド方を訪れた後、電車でボ

ストンへ行く。車中偶然先日のレストラン牧師に會ひ、早速宗教論のつき。米國の諸教會が國旗を拜んでゐるのは何故ですか」と聞いたのは、先生大に弱つたらしい。ボストンの本屋で新しいカナダのベテカア案内を買つて歸る。

六月二十四日(火)

毎日暑い。昨年今頃ワイリアムス・ペーのYMカンパで此の通りだった。

六月二十五日(水)

天文臺どこにも暑いので困つた。午後、寒暖時計は九十六度を指す。三時頃、黒雲が西北から襲つて来て、にはかに大雷雨となつたが其の御蔭で氣温は急に六十八度以下つた。

プリンスストンのラッセル教授から「八月の會に御目にかゝる時、宗教談をしませう」といふ手紙が來た。

六月二十六日(木)

例の通り、天文臺のC館で大型の寫眞原板をあつかつてゐると、三時、頃ふとした拍子に右手を峰にさされた。自分は峰にやられたのは之れが生れて始めてだ。早速、ミス・チャーカーにアムモニア水を落して貰つて難を防いだ。

ワシントンの測地學部のWボキー氏から十月のアドリドの大會に關する親切な手紙を貰つた。

六月二十七日(金)

ブルース板で大マゼランの第五野を検査することは今日で一きりにする。微星の變光曲線は可なりの數が出来たが、十五等ぐらゐから上のやつはベーチ板で一通り檢べて見る必要がある。

夕方散歩。

六月二十八日(土)

ニウヨークの田中館博士からも、例のロマ字で、マドリドの地球物理大會に關する手紙を貰いた。それで、いよ／＼自分等も九月十日出帆のフレンチ線パリ號に乗るゝ決心する。

午後、ベーチ寫眞板のカタローグを作る。三時頃、突然後藤田川上

兩氏が來訪せられたので、中を案内した後、日米問題など話す。後藤田氏も自分も主戦論者で大に意氣投合した。

宅へは、午後四時頃、ミス・モリーが遊びに來られ、英子は寫眞など見せた由。

夕方、チャルス河邊まで散歩。

六月 十九日(日)

午後二時頃からダドレイ線の電車でドルチエスターへ行き、東カティン通ニウヘヴン鐵道線の東側に荒れはてたボンド天文臺の舊家を訪れた。百年以前に之れが米國唯一の天文臺であつて、今のハーグロッド天文臺の親許なのだと思ふと大に感が深い。寫眞を一二枚撮り、それから南ポストンの海岸に出、電車でポストンへ行き、八時頃歸宅。

六月 三十日(月)

朝九時から天文臺。ベーチ原板のカタログを終る。長時間撮影の寫眞板が少ないので、結果の見込は有望でない。

午後七時半、散歩のついでにリニア通のホランド方を訪ひ、明日引き越して來ることにつき種々打ち合はせず。

午後九時から、ライテン君の案内により、招かれて大學ホリス館にC.T. コーブランド教授を訪問。同館の入口に椅子を持ち出して、他の七人の男女學生達と共に種々の話をした。自分は、アメリカ基督教の批評から、日本に於ける精神運動に關する私見を可なり話したところ、相當に興味を惹いたらしい。此の種の米國智識階級には東洋の思想文化の價值が少しは分つて來てゐるを見た。

謹 賀 新 年

大正十四年一月一日

能	小	荒	上
田	林	木	田
忠	忠	俊	穰
亮	次	馬	